

「南京研修参加報告書」

京都大学文学部3年 仲村康太郎

- ① 出国時の自分の語学力は頼りないもので、それは例えば出国日のホテルのチェックイン時にうまくやりとりできないなど、すぐにいくつもの場面でそれを実感した。異国の地で言葉を解せないという不安に襲われ、しばらくの間、本当にどうしたものかなと考えさせられた。しかしながら、現地の大学で勉強しつつ次第に生活にも慣れてくると、やがて少しずつ、これは1ヵ月やっていけそうだなという自信に変わり、無事1ヵ月の行程をやり通すことができた。1ヵ月過ごす上で、同室であった院生の方や同時期に南京研修に参加していた奈良女子大学をはじめとする他大学の学生の存在が心強かったことはもちろんである。結論から言えば、私の語学力は日本出国時に比べればずいぶん良くなったと思う。それは単に言葉を覚えたというより、現地で中国語を話す・聞くという機会が必然的に多く、そこで積み上げたいくらかの経験値が語学力に結びついていると思う。具体的にいうなら、道を尋ねるだとか、レストランでメニューについて訊いてみるだとか、あるいは現地の人から、出身は？・いつ来たの？・何しに来たの？といった類の質問に答えるといった程度の会話なら、臆することなく普通にやりとりできるレベルにはなったといえる。自分の語学力の向上は1ヵ月間で自らはっきりと実感できるものであり、特に最後の1週間で一番伸びたといえるだろう。そうして自分が少しずつ中国語の世界に入っていけているという実感がさらに、じゃあもっと勉強したらもっとうまくなれるだろう、もっと勉強したいな、という意欲につながった。終わってみれば1ヵ月は短く、もっと長期の留学がしたくなった。
- ② 南京滞在中、日本と中国の差異は各方面に現れており、これはすなわち、刺激的な異文化体験である。交通も違えば、街並みも違うし、食の好みも違うし、何から何まで違っているように私には思えた。こういうことは行って初めてわかることであるし、行ってみなければやはりいつまでも実感の得られないことだろう。百聞は一見に如かずである。例を挙げてもきりが無いからここには一つ挙げるにとどめるが、自分の中で強く印象に残っているのが、店の多さである。人や車の多いとおりは道の両側に小さい店がずらーっと、どこまでも続いてそうな勢いで立ち並び、別に大きい通りでなくとも、食堂から果物店から理髪店から書店、写真屋、カフェととにかくお店が並ぶ。それから行商がいたり屋台があったり、道々に商売っ気があふれていた。沢木耕太郎の本に書いてあったことと同じことが起きてびっくりしたことなのだが、雨が降り始めるとどこからともなくちょうど傘売りが現れたりもするのである。
- ③ 本プログラムの内容は現地で文法と会話練習の2種類の授業を4週間、週当たり平日の5日間授業を受けていくのだが、それも午前中の4時間だけなので、午後は放課ということになる。ただ、午後にも中国文化体験の授業や太極拳の授業といった課外活動があり、それはそれで楽しく、気楽に取り組めてよかった。また金曜日にはガイド付きの観光があってガイドさんの熱心な説明が自分のつたない語学力では全然理解できなかったのが残念なところであるが、それでも楽しかった。土曜日の午後は中国人学生との交流があり、向こうも多少の日本語を扱える方が多く、時には中国語で、時には日本語で会話して、お互いが勉強になるような貴重な交流機会であった。その他自由時間はかなり多く、観光や買い物、散策、読書など思い思いに時間が使え、むしろ日本にいるときよりものびのびと生活できた。
- ④ 時期が時期でもあり、南京滞在中に、自分は卒業後大学院進学を目指すか、来年就活に励むか悩むことが多かった。結果として決めたことを書けば、自分は大学院に進学しよう少し勉強して、より中国語や中国に対する理解を深めたいというのが結論である。それは語学力の向上を実感し、更なる向上の可能性を見出したように、自分自身に、もう少し勉強してそれで自分の理解や考えが深まる可能性を信じ追い求めてみたいという探究心から出たものである。南京研修が自己の進路に正の方向に影響したのは間違いない。